NEWS FROM ZION
シオンとの架け橋ニュースレター　第50号　２０１６年夏号（年４回発行）

韓国からイスラエルへ

ＩＭＮ総務 イム・ドヒョン

私は若い頃から、神が望まれる人生を生きるために、熱い思いで走ってきました。20歳では革命家イェシュアに、30歳では聖霊に満たされたイェシュアに、40歳では宣教するイェシュアに、50歳では病を癒すイェシュアへの熱い思いを抱いていたのです。

✺イスラエル回復のビジョンをつかんで

やがて、神の最終的なビジョンが、ヨハネの黙示録で明らかにされている通り、イェシュアが再臨されて、この地に神の国を建てることであると理解するようになりました。そして、その日には主と共に居たいと思うようになりました。

神のビジョンは世界宣教と共に、今ひとつの軸をなすイスラエル回復です。過去６年間、イスラエルのことのみを考え、黙想し、叫び、伝え、生きてきたように思います。この驚くべき神のビジョンに召してくださった聖霊様に感謝します。

AMFツアーに参加した韓国チームのメンバー。
中央がイム・ドヒョン師

✺AMFツアーに参加して

私にとって今回のＡＭＦツアーは、４回目のイスラエル訪問でした。過去３回のイスラエル旅行が、「イスラエルの過去との出会い」であったとすれば今回は、「イスラエルの現在と未来との出会い」の旅でした。

イスラエルは過去の傷、サタンの容赦ない攻撃（同性愛、テロ、戦争、無秩序、宗教の霊など）に困惑しています。その姿は、エデンの園とはかけ離れたものです。しかし神の真実な契約があるので、イスラエルの地は必ず回復され、神の国は成就されるでしょう。そのためには、異邦人とユダヤ人が新しいひとりの人になって、イスラエルの地に生気を与え、イェシュアがメシアであるという福音を伝え、その地をおおう闇を破る必要があると思います。

そのために重要なのは一致――アジアの国々がエルサレムの平安のために祈ることでひとつになるならば、アジアの傷も癒され、さらに諸国の教会とイスラエルがひとりの新しい人を実現することに寄与できるでしょう。

✺ ＩＭＮのビジョンと活動

ＩＭＮは20数年前、先輩たちがイスラエルの回復の重要性を知って活動を開始しました。それが、執り成しの祈りを中心とした働きであったとすれば、現在はイスラエルの回復のための具体的な献身と奉仕の働きをする時になったと感じています。ＩＭＦは現在、次のような活動を行っています。

◇

1．**家庭教会の開拓運動**　ハデラ、ラムレ、リション・レツィオンにおける教会開拓の後援を始めました。まずユダヤ社会の辺境にいるロシア系ユダヤ人に福音を伝える働きを支援し、韓国の教会とイスラエルの家庭教会が姉妹提携できるよう祈っています。

2．**イスラエル・ミニストリー・スクール**　すでに国内外で25回実施。それは、①選ばれたイスラエル ②苦難のイスラエル ③回復されるイスラエル ④終わりの時とイスラエル ⑤教会とイスラエル という５つの主題から構成された講座で、韓国語と英語、中国語による教材とパワーポイントが用意されています。

3．**季節の集会（過越祭、五旬節、仮庵祭）**　2012年からIMN に所属する団体の集まりで年に３回集会を開き、韓国の全都市で集会ができるように祈っています。

4．**ＩＭＮ祈祷会**　毎週木曜日にソウルのペニエル教会に集まり、イスラエルの回復と全ての国々のため、また統一（訳注：朝鮮半島の統一）のための祈り、天の門が開かれる恵みと油注ぎを経験しています。

◇

他に、文化事業、ビジョン旅行、ネットワークの働き、トーラー研究、神学校、国際関係を研究する働き人と団体に関係したものがあります。

最後に、日本の皆様が AMF ツアー2016の準備などで奉仕をしていただいたことに、もう一度、感謝を申し上げます。トダ・ラバー！

ＩＭＮ(Israel Ministries Network)とは　韓国の、イスラエル関連ミニストリーのネットワークです。2011年、日韓共催のアジア・メシアニック・フォーラムで、韓国側主催団体となって下さいました。現在、70余りの団体が加盟し、さまざまな活動をしておられます。現在のリーダーはイム・ドヒョン師です。ＩＭＮのメンバーは、ＴＪＣⅡ（第二エルサレム会議に向けて）や、ＬＣＪＥ韓国支部などの活動にも参加しておられます。

AMF2016イスラエルツアー報告

与える実践ができたツアーでした

シオンとの架け橋　石井田晶二

初夏のさわやかな風の中、ヒネマトヴのメロディに乗せて歌が始まります――♪Behold how good and How pleasant it is for brothers to dwell together……。

会場は、イスラエル中のメシアニック・ジューが集結する、最も歴史ある最も大きな聖会です。歌ったのはアジア８か国からイスラエルを訪問した36人。

1000人を超すメシアニック・ジューの前で歌いました。シンガポール、フィリピン、インドネシアの人々の英語に続いて、インドのメンバーはヒンディー語で、タイからタイ語、台湾から中国語、韓国から韓国語、そして日本からのメンバーは日本語でこれに続きます。♪見よ兄弟たーちが　ひとつになって　ともに住むことーは　なんというしあわせ……。

最後は、全員でヘブライ語です。

♪ヒネマトヴ　ウマーナイム　シェベット　アヒーム　ガムヤーハッド……。

歌が終わろうしたとき突然、聖会の責任者でもある司会者のハナン・ルカス師がマイクを持ってステージに上がり、もう一度ヘブライ語でリードして歌い始めたのです。

会場は一つになって歌い、まさにこの歌詞、詩篇133：１が現実になったことを感じる一瞬でした……。

8か国から参加の多言語ヒネマトヴが好評

これは、6月2日から12日まで行われた、「アジア・メシアニック・フォーラム2016イスラエル・ツアー」の一場面です。エルサレム近郊にあるヤッド・ハシュモナ（メシアニック・ジューが運営する共同体です）で開催された聖会「シャブオット・フェスティバル」に参加した時の感動的な光景でした。

この聖会については以前にも「シオンとの架け橋」で紹介したことがありますが、イスラエル在住のメシアニック・ジューにとって最大、最古のイベントです。今回、私たちのツアーが参加するに当たって、こころよくプレゼンテーションの時間を与えて下さいました。特に音楽が得意な人がいたわけではなく、「苦肉の策」として、各国の言葉でヒネマトヴを賛美することになったのでした。ルカス師は、「大変良かった。祝福された。来年もぜひ来てほしい」と、興奮した口調で語って下さいました。

このツアーは2014年に初めて実施され、今回が２回目です。大変好評だった前回同様、イスラエルの建国と発展、メシアニック・ジューの出現は預言の成就であることや、メシアニック・ジューの現状を学びつつ、交流しながら今後の方向を考えることを目標に実施されました。人数は前回より少なかったのですが、前回参加国にインドネシアを加え、８か国から36人が参加しました。

旅程は前回と似ていますが、いくつかの新しい要素もありました。そのなかには、今回ツアーに参加した人々の紹介で実現した訪問もありました。それらを以下にレポートします。

クネセット（国会）訪問

当初、通常の観光コースの予定だったのですが、タイの参加者の紹介で、国会運営に当たる重要なスタッフと会い、話を聞くことができました。「イスラエルが生き残って行けるのは、ユダヤ人の頭脳、神の助け、そしてクリスチャンの皆さんのおかげ」とのこと。参加者それぞれの国とイスラエルの旗をセットにしたものを記念に贈呈しました**（←写真）**。

帰還者受け入れセンター

国と深い関係を持つ機関、ケレン・ハイェソッドが運営する帰還者受け入れセンターも訪問しました。これも、参加者の一人が台湾の地方組織の責任者だったことから訪問が実現したものです。エルサレムの近くにあり、エチオピアからの帰還者がイスラエル社会に溶け込めるよう、さまざまな支援を行っています。

エチオピア出身のラビが、砂漠を歩いて越えてイスラエルに向かった証しを聴くことができました。さまざまな危険を乗り越え、現在地が分からない瞬間もあったとのこと。絶対に祖国へ帰ることを願う民族としての意志と共に、神がその行程を守り導かれたことがはっきりと分かる、驚くべき内容でした。

センターのパンフレットには、この機関が預言の成就のために活動し、イスラエル建国はメシア来臨の第一歩であると書かれています。ユダヤ人がクリスチャンと似た終末論を持っていることが実感としてよく分

アジア・メシアニック・フォーラム2016イスラエル・ツアー

かりました。

軍の基地と監視センターを訪問

旅行の運営をお願いしたホープ・フォー・イスラエル（ＨＦＩ）の手配で、軍の監視センターと基地を訪問することができました。監視センターはカメラで西岸地区を監視しています。基地では兵士の皆さんと、昼食を共にしながら交流できました。この訪問は、ＨＦＩが軍隊へのさまざまな支援を行い、深い信頼関係があるので実現しました。同行したツアーガイドも、「基地訪問でこんな対応は初めて」と驚いていました。

西岸地区・ゲリジム山周辺

サマリヤ人が今も独特のアイデンティティを守って生活しているゲリジム山からは、西岸地区最大のバラータ難民キャンプを眺望できます**（写真→）**。イスラエル建国直後に作られたこの難民キャンプは、約500㍍四方に小さな家がぎっしりと立ち並び、約３万人の難民が暮らします。整備された集合住宅が隣接しているのですが、解説によると、それらはイスラエル政府が難民のために作ったものなのに、彼らはパレスチナ人指導者への「恐怖」からそちらに移住できない、とのことでした。ゲリジム山の反対側には、アラファトが一時所有していたといわれる「宮殿」のような家を見ることもできました。

ホロコースト生存者との交流

今回ツアーは、冒頭のシャブオット・フェスティバルのように、現地の人々にとっても祝福となるアクティビティーを積極的に取り入れました。その一つがレオン・マジン師のおかげで実現した、ハイファでのホロコースト生存者との交流です。前回は、一緒に食事をしただけでした。今回はその反省を踏まえ、各国からのプレゼントや音楽の出し物を準備しました。

特に京都グローリーチャーチの吉田あんな先生によるロシア語の歌が大変好評で、皆さんの表情が和らぎ、80歳を超える高齢であるにも関わらず踊り出す人々も現れました。そこから会話の花が咲き、お別れにプレゼントを渡した時は皆さん大変喜んで名残惜しそうでした。ホロコースト生存者は、神の存在を信じられなくなった人が多く、マジン師らは少しずつ、その心をほぐしている段階。今回の活動が、その助けになったのではと願います。

兵役中の若者の集会に参加

これは、イスラエル最大のユースミニストリー「ネティバー」（ヨエル＝ジョエル＝・ゴールドバーグ師）の主催。兵役は、メシアニック・ジューの若者にとって大変困難な体験です。多くの未信者や正統派の同胞と深い人間関係を持つため、信仰を失う危険性が大変高い期間です。私たちは兵役期間中の若者のプログラムに部分参加しました。

私が語り合った、戦車の修理をしている若者は、「身の回りは宗教的な人が多く、嫌な目に遭うことも多い。今はあまり信仰については話さないが、それは嫌がらせを恐れるからではなく、話せるチャンスを待っているのだ」とのことでした。

かつてはなるべく誰にも気づかれないよう努力していたメシアニック・ジューたちが、大胆に福音を語ろうとしています。長年の祈りの成果を目の当たりにして頼もしく思い、彼らが守られ、その証しが実を結ぶように祈ることの重要性を再確認しました。

▷AMF2017台湾大会に向けて

今回のツアーで私たちアジアのクリスチャンは祈りと共に、具体的な活動を通しても、イスラエルとメシアニック・ジューを励まし、祝福する方法があることを再確認しました。昨年、京都グローリーチャーチの尽力で実現した、ハイファでの日本文化フェスティバルがその好例です。

ツアー中に、AMF2017台湾大会に向けて打ち合わせ、調整が本格化したほか、台湾からの専門のスタッフによるプロモーションビデオ撮影も行われました。このツアーで深まった認識と関係がさらに深まり、来年夏の本大会につながるよう祈りたいと思います。

ツアーに参加して　訪問レポート

AMFツアーならではの訪問地 最新の動向を知って祈れるように

日之出キリスト教会　高橋ひとみ

イスラエル訪問は５回目で、前回から６年ぶりでした。通訳として参加させて頂きました。旅を通して思ったことは「イスラエルの物理的、霊的復興」でした。

10箇所のメシアニック団体を訪問し、その他に数人のメシアニックの指導者や、レバノン人やアラブ人を導くアラブ人牧師たちの講演がありました。過去４回の訪問で、これほど多くの組織を巡り、現地の指導者に会ったことはありませんでした。

ハイファで活動するアラブ系イスラエル人の牧師。北欧でも中東から来たイスラム教の難民に伝道している

✺ベテランでも初めての場所ばかり

訪問場所も、ほとんどが初めての場所ばかりでした。独立記念館、大規模なテロがあった場所２箇所、アトリット収容所（英国委任統治時代、不法入国者を収監した施設。その後、移民受け入れ施設へ変更）、キブツ・イファット、アヤロン地下弾薬工場博物館、キブツ・ニール・アム（ガザが目の前）、シロ、ゲリジム山、クネセット、弾薬の丘、ネティバー主催のメシアニック兵士たちのキャンプなど、初めてイスラエルを訪問する人はほとんど行かない場所でした（自由時間も、ダビデの町や旧市街の教会、最高裁判所見学と、これまた行ったことがない場所に行けました）。

✺ITやスタートアップ企業の勃興

５年ぶりのイスラエルで驚いたことは、新しいＩＴ企業が雨後の竹の子のようにあちこちに「湧いて」おり、さながらＩＴブームのようだということです。ＩＴだけではなく、今やイスラエルは新しく立ち上がる「スタートアップ」企業が最も多い国の一つです（他にインドや、まだまだアメリカも負けてはいません）。移民と高い出生率で人口も増え、2030年頃には１千万人を超すだろうといわれています。非常な勢いで新しい住宅が建ち並んでいました。建国68年を迎え、イスラエルは物理的に勢いをもって「復活、復興」しています。

✺社会で好意を持たれるイェシュアの弟子

霊的復興についても、メシアニック・ジューの数は順調に増え、その存在は、社会的にも認知されている様子でした。彼らは国家に忠実で、兵役に就き、きちんと納税する市民であることから、「ユダヤ教徒」としての「ユダヤ人」とは認められてはいないものの、「イスラエル市民」としての立場は確保しています。ゲルション・ネレル師いわく「クリスチャンとなったユダヤ人で、イスラエル市民」というカテゴリに入っているとのことです。シュラム師もおっしゃっていましたがネレル師も、「メシアニック・ジューという呼び名は、正統派でルバビッチ派もそう呼ばれることがあり、誤解を招く。私が好むのは『イェシュアのユダヤ人弟子（Jewish disciples of Yeshua）』という名称だ」とおっしゃっていました。ユダヤ人の「イエスの弟子」たるメシアニック・ジューは、兵役に就かず、生活保護が許されている正統派ユダヤ教徒よりは、イスラエル社会において好意を持たれている様子です。

✺次世代リーダーが育っている

また、今回メシアニック団体を訪問して分かったことは、多くのコングリゲーションにおいて、イスラエルで生まれ育った次世代の指導者が育っていることでした。どの組織も海外からの支援を受け、積極的に伝道のためのインターネット活用や、出版、弱者救済のためのさまざまな施設や手段を持ち、また弟子訓練のため、複数コングリゲーションが協力してユースキャンプなどを行っています。次世代は皆イスラエル育ちで兵役を経験し、コングリゲーション間の横のつながりも強く、第１世代と違って「仲間意識」が強いのが特徴です。これから彼らがメシアニック指導者として、世界中に派遣されることになるでしょう。「シオンから御教えが出て、エルサレムから主のことばが出るからだ」（ミカ４：２）との預言が実現しようとしています。イスラエルの物理的復興と霊的復興が車輪の両輪のように進んでいるさまを目にし、終わりの時の足音が聞こえるようでした。

今回、日本を含め８か国の代表がツアーに参加しました。その中で、東南アジアからの参加者で、これまでイスラエルに何回も訪問して、「トム・ヘスの万国祈りの家運動には関わってきたが、メシアニック・ジューとの接点が今までなかった。今回、これほどまでにメシアニック・ジューたちが土台を固め、発展していることを知り、より一層イスラエルにいるイエスの弟子たちに目を向けなければという意識が深まった」と話す方もおられました。

私も、今まで接点のなかったメシアニック・ジューや、レバノン人やアラブ・クリスチャンにも目を向けて、彼らの動向に注目して行きたいと思いました。

大変有意義で、意味ある旅に参加させて頂き、主に感謝すると共に、主催して下さったシオンとの架け橋の方々に心から感謝を捧げたいと思います。

まなび メシアニック運動の過去・現在・未来

ゲルション・ネレル博士 講演

メシアニック・ジュー（ＭＪ）の歴史研究でヘブライ大学の博士号を持つ、この分野の第一人者ゲルション・ネレル師が、ツアー参加者を対象に、特別セミナーで語って下さいました。内容の一部をご紹介します。

✺「メシアニック・ジュー」という用語の問題

今やヘブライ大学においてさえ、ＭＪは堂々と論じられています。今まで、ユダヤ教の世界もキリスト教の世界も、イエスを信じるユダヤ人の存在を、沈黙によって抹殺してきたのですが……。

「メシアニック・ジュダイズム」という呼称には問題があります。それは「メシアを信じるユダヤ教」という意味なので、ハバッド（敬虔派）の一部のように、特定の人物（我々から見れば偽メシア）を信じるユダヤ教派も「メシアニック」ということになるからです。

ですから、「ヘブル人クリスチャン」「ユダヤ人クリスチャン」などさまざまな用語が使われます。とはいえ、ＭＪという呼称はすでに定着し、「エベン・ショシャン」（ヘブライ語の権威ある辞典）は1967年版からその語を収録。その定義を、「民族的にはユダヤ人だとし、イスラエル国家に忠誠を示すが、宗教においてはキリスト教であるユダヤ人」としています。

私は、「ＪＤＹ(Jewish Disciples of Yeshua、イェシュアのユダヤ人弟子)」が適切な呼称だと思います（本稿はＭＪで統一しました）。

✺キリスト教徒は非ユダヤ人との最高裁判例

オズワルド・ルフェイセン(1922～98)は、修道院にかくまわれてホロコーストを生き伸び、多数のユダヤ人を救う功績がありましたが、カトリックに改宗。ハイファのカルメル修道院に入り、自らはユダヤ人だとして、帰還法による国籍取得を申請。内務省は拒否し最高裁も1962年、「キリスト教改宗者はユダヤ人ではない」との判断を示しました。後に彼は、通常の帰化手続きでイスラエル国籍を取得しますが、この判決は、現在のＭＪ運動にも大きな影響を与えています。

✺キリスト教とMJ運動

イスラエルのＭＪは法的にはアムター（非営利組織）として登録され、キリスト教会と違う組織です。しかし、ニカヤ信条など主要な信条を認める点で、プロテスタント教会の流れを汲みます。

イスラエルにメシアニック系の神学校が少なく、次世代教育のため外国の神学校に若者を送り込むのは大きな問題だと思います。神学校は、聖書を教えるというよりも各教派の見解を教え込むからです。

✺終りの時代の預言の成就という理解

宣教師たちが、救われたユダヤ人を「キリスト教に改宗」させて異邦人にする流れに抵抗するのがＭＪ運動です。ＭＪ運動は、ユダヤ教からもキリスト教からも枠外にあり、ちょうど敵対勢力の間の緩衝地帯のような位置にあります。

2000年前の初代教会の直接の継承者であるというのがＭＪの主張ですが、実際は歴史的な断絶があります。「使徒継承による権威はなく、ＭＪに権威の根拠がない」との非難もあります。そこで権威の根拠を、終わりの時代における預言的なものに求める傾向があります。

置換神学の問題も根深く存在します。

✺ユダヤ的な信仰表現の温度差

イスラエルのＭＪの大半は、何らかのかたちで祭を守っています。過越の祭と聖餐式の関係は特に重視され、さまざまなハガダー（式次第）を制作して来ました。そこには新約聖書の教えが加えられて来ました。

コシャー（ユダヤ法による適正食品）や、キッパなどの伝統的服装を、信仰表現として取り入れるＭＪも多いのですが、それらに関するラビたちの教えを、どの程度まで認めるかは、各ＭＪによって温度差があります。

✺終末への待望と今後の課題

ＭＪ運動は終末論的な色彩が強く、多くのＭＪがメシアの来臨は近いと考えます。再臨のメシアは権威と栄光に満ち、世界に平和をもたらすと考えるのは共通項目ですが、「携挙」については見解の相違があります。

しかしＭＪの出現が、イスラエル回復預言の成就の「初穂」であるという点は、多くのＭＪの見解が一致します。

ＭＪは、その存在自体が伝統的教会に対する挑戦となるため、今後も反発は避けられないでしょう。教会の、ＭＪに対する批判の一つは、ＭＪがクリスチャンの「ユダヤ人化」を目指しているというもので、これは我々も注意すべきです。

ユダヤ人を異邦人にするのと同様、異邦人をユダヤ人にするのも間違っています。

西洋の教会への財政依存、神学的依存からの脱却と、聖書に反する教えをやめ、幼子のように聖霊の導きに従うことが今後の課題と思います。

ネレル師の神学的見解は、やや極端だとの批判もありますが、歴史学者としては定評があります。

ルツ記に見る贖いの原則

失敗しても召しの道に帰れる

ピーター・ツカヒラ

今日の礼拝で、アジアから来られたツアーの皆様にお会いできて嬉しく思います。彼らは、イスラエル回復のビジョンをアジア各地に広めて下さっています。

今日はルツ記の学びの最終回です（訳注 シャブオットにはルツ記を学ぶのがユダヤ人の風習）。この書の主題は「贖い（あがない）」です。家族が没落して財産を失った場合に、近親者がそれを買い戻す制度のことです。ほかにヨベルの年という制度もあり、失われた財産は50年後に、元の持ち主に帰るのです。

ツアーで参加した礼拝の際の賛美

これらの規定の目的は、第１に民の中に貧しい人がいないようにすること。第２に、イスラエルの全ての人が、嗣業（相続財産）の土地を持つべきとの概念です。神の計画において、一人ひとりに大切な役割があり、そのために嗣業の地が必要なのです。

過越の祭の際に引用される出エジプト６：６～７には、神のご計画が示されています。そこにある４つの動詞が、祭りで飲む４杯のワインに対応するとされ、３杯目が「贖い」です。それは、買い戻して神の本来のご計画に戻すという意味です。だからダビデは詩篇19：14などで「我が贖い主」と歌いました。イエスは、ご自身が贖い主であることをマタイ20：28で宣言されました。

✺放蕩息子や、ペテロの失敗のように

ベツレヘムに住むナオミとエリメレクは、若い時にモアブに移住しました。希望に燃え、新しい生活を求めたことでしょう。２人の息子には、モアブから嫁を迎えました。ところが、エリメレクも息子らも死に、ナオミは２人の嫁と共に残されました。財産も若さも失い、失意のうちに帰って来たのです。

この物語は、放蕩息子の帰還を思わされます。彼は遠い国に行き、全てを失って父の家に帰るのです。彼は砕かれて帰って来たのです。シモン・ペテロもそうでした。彼は若く、イェシュアに従って、世界を変えようと希望に燃えていました。しかし、イェシュアは処刑され、ペテロは３度も主を否みます。何という失敗でしょう。失意のペテロに主は、「私の羊を飼え」と、小さなことを命じられました。世界という大きなことではありません。ペテロがそれにこたえた時に、彼の失敗は贖われ、使命が回復されたのです。

私たちの一人ひとりに神はご計画をお持ちです。それは私たちの失敗によって変えられません。賜物と召しは変わらないのです。失敗しても、神は私たちを元のレールに戻されます。それが「贖い」です。

ナオミもそうでした。彼女はベツレヘムにあった嗣業を捨て、自分の計画を歩み挫折しました。砕かれて元の場所に戻ります。それがダビデの家系回復のために必要だったのです。彼女の失敗で、回復、購いへの道が開かれました。

✺まだ嗣業の地は残っていた

帰郷した時、全てが失われたと思っていましたが、実はまだ財産が残っていました。売られて人手に渡っていましたが、贖いにより回復できたのです。重要な役割を果たすのがルツです。彼女はまだ若かったけれども、ナオミと共に見知らぬ地に行く決断をしました。「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神」と言ったのです。その決断で人生が変わりました。彼女の失敗の人生もまた贖われたのです。ルツはイスラエルの風習を何も知りませんが、踏み出しました。神を信じて勇気を持って決断しました。ちょうど行き先を知らないで出発したアブラハムのように。

✺みこころへの従順が回復をもたらす

それは信仰の力です。主のために歩むと決めた時、必要なものは全て、贖い主が与えて下さいます。それは、神のご計画があなたの人生で成就するためです。

彼女はボアズの畑で見初められました。そして、ボアズは親戚の義務を果たしたのです。その時、失敗と見えたナオミの人生も、ルツの人生も、回復し贖われました。それだけではありません。ボアズとルツの子孫としてダビデが生まれました。詩篇139：13「あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組み立てられました」。ダビデのDNAの一部はルツのものでした。それは、神のご計画に必要だったのでしょう。

神は私たちの失敗を贖い、もう一度、神のご計画の路線に戻すことがおできになります。そのために必要なのは、ほんの少しの従順です。神のご計画に従う決断なのです。

Netivyah
ネティブヤのコーナー

カナン偵察の記事に学ぶ
信仰の目で現実を見よう

ヨセフ・シュラム

民数記13：１～15：41は、モーセが12人の斥候を遣わしてカナンの地を偵察させた出来事です。

12人は皆、族長で、民から尊敬されていました。彼らはカナンの地の現状についての事実を語りました。しかしそのうち10人は、そこから次のような結論を導き出しました。１）カナンの民は自分たちよりも強く、自分たちは攻め上れない　２）カナンの地で自分たちは滅ぼされる　３）カナンの民に比べたら自分たちはいなごのようだ。

そこで、イスラエルの民は次のように言い出しました。１）エジプトか荒野で死んだ方がまし　２）カナンの地で、自分たちは殺され妻子はさらわれる　３）エジプトに帰ろう　４）別のリーダーを立てよう。

✺神とつながる時に働き始めるもの

確かに、カナンの地の現実に関するレポートは正しいものでした。しかしその現実を、信仰の目で見なければなりません。カレブはこう断言しました。「わたしたちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」。

肉の目は、肉の限界しか見ることができません。もちろん何人兵士がおり、どれだけの戦力があるかという現実認識も大事です。しかし私たちは、単なる多数の細胞の集合体ではありません。私たちの内側には、目で見ることも計算することもできない別の要素が存在します。その部分に火をつける「神の火花」とでも呼ぶべきものが存在しているのです。

私たちの内には、神聖な部分があるのです。私たちの内なるこの要素が、宇宙万物の源なるお方とつながる時、聖霊と呼ばれる神聖な「素粒子」が働きはじめます。

表現するのに相応しい言葉がないので、私たちはこの「神の素粒子」の働きを「信仰」と呼んでいます。目に見える現実を超えて物事を見る能力です。私たちを造ったお方を見る信仰の力です。私が世界中の兄弟姉妹に気づいて欲しいことは、私たちの理解の限界をはるかに超えて神は、私たちの人生に御業をなすことがおできになるということです。

信仰は、人間に与えられる「神の素粒子」を活性化させます。しかし、私たちが全能の神のしもべとなれるよう、正しい方向にそれを活性化できるのはただイェシュアと聖霊だけです。

カレブとヨシュアは、神と神の力を知っていました。イスラエル初代首相のベングリオンもそれを知っていて次のように言いました。「イスラエルで奇跡を信じないなら、あなたは現実主義者ではない」。イスラエルの歴史全体は、ゴリアテを殺したダビデのパラダイムの上に建てられています。神の利益を守ろうとする時、弱い者は強くされます。正義や真理の側に立つ時、少人数は勝利します。人を愛する者は、最終的には必ず、人を憎む者に打ち勝ちます。

✺神を第一とし、信頼する時に

兄弟姉妹の皆さん。イェシュアのおかげで私たちに与えられている「神の素粒子」の偉大な力を決して失わないで下さい。イェシュアは私たちの罪を赦し、私たちをきよめ、聖霊の住む神の宮にして下さったのです。

神の御霊の真の力は、この世の目算や人間の論理に逆らってでも、神のために働く時に得られます。メシアの弟子は皆、この「神の素粒子」を自分のうちに持っていなければなりません。

これは賜物ですから、買うことはできません。自分で獲得することや、大学の学位によって得ることもできません。ただ、カレブとヨシュアの心と思いを持ちましょう。私たちは神を敬う者です。

私たちの内なる「神の素粒子」が再び活性化するように祈ります。私たちが人生において神を第一とし、人知を超えたお方である神に全ての信頼を置くことができますように。神は全ての病から私たちを癒し、私たちの必要（欲しいものではなく）を全て満たすことがおできになります。神はイスラエルを、そしてイスラエルを祝福する人たち皆を、祝福することができます。

AMFツアーを迎えての祝福
正統派出身のユダヤ人がイェシュアに興味持つきっかけに

ネティブヤスタッフ

「イエスのからだとイスラエルの家、両方と共に歩む」という私たちのビジョンが、AMFツアーの皆様の来訪によって小さな実を結んだので、分かち合いたいと思います。

☙アジア8か国から同時の来客は初めて

AMFツアーで、アジア各国から来られた兄弟姉妹と一緒に、シャブオット前日のシャバットを過ごすことができました。私たちのコングリゲーションでの礼拝には毎週、世界各地からのゲストが参加し、アジアからの兄弟姉妹も多くいます。しかしアジアからだけで、８か国ものビリーバーを迎えることは、私たちに

とっても初めての経験でした。礼拝堂の大きさの関係で、一部の皆様には下の階に座って頂くことになり、申し訳なかったのですが、シャバット礼拝の雰囲気を感じて頂くことができたならば幸いです。

☙バス・ドライバーのYさん

AMFツアーのバス・ドライバーは前回と同じＹさんで、彼はビリーバーではありませんが30年以上にわたり、イスラエルを愛するクリスチャンの巡礼旅行に関わり、運転手として数多くのメシアニック・コングリゲーションを訪れて来ました。今までメシアニックについて理解は示す一方、特に何か惹かれるものもなかったとのことですが、今回はツアーの前にネティブヤの話を聞き、メシアニックでは珍しいユダヤ的な礼拝に興味を持って、奥さんとそのお姉さんの３人で、AMFツアーと共にシャバット礼拝に参加されたのです。

☙正統派の家庭出身の奥さんと共に来訪

その日Yさんの奥さんとお姉さんは、わざわざ朝７時前に家を出て、Yさんと共にエルサレムに来ました。彼女たちは、今は世俗的な生活を送っていますが、元は宗教的な家庭に育ったそうです。宗教的背景を持つユダヤ人が、シャバットにわざわざ早起きをし、２時間掛けてメシアニック・コングリゲーションの礼拝に来るのはなかなか起こり得ないことです。

礼拝後にスタッフが３人に感想を聞くと、ユダヤ的でアットホームな雰囲気や、男女が一緒に座って祈る様子などに非常に良い印象を抱かれ、「このようなシナゴグ（コングリゲーション）がユダヤ教社会の中で認められる時代が来れば……」と話されました。

☙1世紀に起こっていた壮大なドラマの再現

このエピソードは、ネティブヤの歩んできた道が間違っておらず、神がこのコングリゲーションを用いておられるという大きな励ましとなりました。彼らがビリーバーになった訳ではありませんが、ここイスラエルで宗教的なバックグラウンドを持つ人が、（個人的にではあれ）メシアニックを宗教的に認めるということは奇跡的なことなのです。そんな出来事のきっかけが、アジアから来られた兄弟姉妹だったというのは非常に象徴的です。

これと同じようなことが１世紀に起こっていたはずです。当時、パウロはじめ使徒たちからの教えにより多くの異邦人がイェシュアを受け入れ、彼らはイェシュアを受け入れた異邦人としてシナゴグに出席し続けました。それを間近で見たユダヤ人たちはきっと、ユダヤ人特有の好奇心から異邦人ビリーバーに興味を持ち、それをきっかけにユダヤ人の使徒たち（１世紀のメシアニック・ジュー）と出会ったはずです。その中には、ビリーバーになった人もいたことでしょう。神は2000年ぶりにそれを再現しようとしておられます。ツアーの皆様が出席されたシャバット礼拝で、そんな神の壮大なドラマを感じたことは、ネティブヤにとっても大きな喜び、祝福でした。

9月 ネティブヤセミナーご案内

終末論の危険性と重要性

イスラエル問題は終末論と深く関係していますが、終末論への「こだわり過ぎ」は、信仰生活を狂わせ、教会を分裂させます。聖書はなぜ終末を語るのか。ヨセフ・シュラム師が旧約聖書と新約聖書から解き明かします。

今年はルーベン・コブナーさん（日本では観光ガイドとしても知られるネティブヤの秘書、ハナ・コブナーさんの子息）が同行。日本でも奉仕の予定です。

ルーベンさんの訪日は、親子そろって訪日した2006年から10年ぶり。当時中学生だった彼も成長し、兵役を昨年終え、今年10月にヘブライ大学入学予定です。シュラム師から、「ネティブヤはもちろん、イスラエルのメシアニックの未来を担うだろう彼に、ぜひ日本をはじめアジアの皆さまを知ってもらおうと、同行が決まりました。まだまだ若輩者ですので、祈りと温かい見守りをお願いします」とメッセージが届いています。

- ❖東京　9月19日(月・祝)　大手町サンケイプラザ
- ❖名古屋　9月21日(水)　ウインクあいち
- ❖大阪　9月22日(木・祝)　エルおおさか

＊時間はいずれも午後２時～５時、予約不要
＊無料（席上献金あり）

主催　シオンとの架け橋・聖書に学ぶ会
お問い合わせは　電話078-341-7501

Jewish Calendar

תשעה באב　神殿崩壊日（ティシャ・ベアヴ）８月14日

第一神殿、第二神殿がいずれもこの日に破壊されたといわれる。その他にも多くの民族的災難が起こった。加害者への復讐を誓う日ではなく、断食して嘆き、民族の罪を悔い改める日となっている。

ראש השנה　ラッパの祭（ロシュ・ハシャナ）10月10日

聖書においてはラッパを吹き鳴らす祭。後に新年祭となった。リンゴに蜂蜜をかけて食べ、良い新年を願う。

יום כיפור　大贖罪日（ヨム・キプール）１０月12日

סוכות　仮庵の祭（スコット）10月17日～23日